2002年2月4日

セミナー通信　Ｖｏｌ．９４　西村セミナールーム

主宰　西村　和彦

ハリー・ポッターとホグワーツ魔法学校

いまだにロングランを続ける映画「ハリー・ポッターと賢者の石」ですが、年末に見に行ってきました。私は一切原作などを読まずに映画を見たのですが、なるほどあれは「イギリス」を感じさせる映画でした。列車の車窓からみる風景やダイアゴン横町の雰囲気はもちろんですが、ホグワーツ魔法学校の設定や何よりも主人公がハリーであることが、ヨーロッパ的な感性にしっくりしているのであろうと納得しました。

よく日本の社会は「学歴偏重・管理主義」と非難されます。それは学校教育にもあらわれていて、「個性を無視した画一化教育のもとペーパーテストの結果がすべてとする面が悪である」と言う教育関係者も少なくないでしょう。しかしその反省から生まれた「ゆとり教育」への方針転換は、「生徒の権利と個性の尊重」を追い風に、傍若無人な生徒を増加させ、学級崩壊と基礎学力の低下を引き起こしているのが現状ではないでしょうか。

映画に出てくるホグワーツ魔法学校には、制服があり、厳格な先生がいて、整然とした授業・細かな校則と連帯責任の減点や罰則まであります。まるで昔の日本の学校のようですが、イギリス的だと思わせるのは、入学資格が試験（知識・努力）ではなく「魔法使いの才能」という血（家柄・ＤＮＡ）によるものであることです。この設定こそが代々貴族や職人という身分社会の残るこの国の普通の感性なのでしょう。

話の中でハーマイオニーという優等生の女の子が出てきます。この子は普通の人間の子でありながら「選ばれて」魔法学校に入ったのですが、努力に努力を重ねて学年トップの成績を取ります。しかし、彼女はハリーのようにはなれません。努力や知識よりも家柄・才能がハリーをヒーローにしていきます。日本人好みの映画なら、むしろハーマイオニーが主人公になるような気もします。

学歴社会は試験による選別は行ないますが、基本的に「血」は評価の基準とはしていないはずです。もちろん才能の有無はＤＮＡにより決まってしまうのかもしれませんが、それでもなお、本人の意思と努力で補える可能性が残されています。

ＤＮＡの解析が進んでいますから、個人の特性や才能などもわかるようになるでしょう。そうなれば、高校入試や就職は試験ではなく、血液検査で決まるようになるのかもしれません。そんな社会が希望ですか？

こう考えると、身分重視社会より学歴重視社会のほうが日本人の価値観にあっていると思います。